



心ふるえる体験が「生きる力」を育む

温暖な気候と美しく豊かな自然に恵まれた沖縄は、日本で最も人気のある観光エリアの一つ。この沖縄本島中北部を中心に体験教育プログラムを実施しているのが今年で設立十一年目を向かえる「沖縄体験ニライカナイ」です。修学旅行の受け入れは延べ五十万人を突破し、その八割がリピーター校という実績を誇る「沖縄体験ニライカナイ」の代表加蘭さんに、魅力ある体験とは何かお話をうかがいました。



沖縄体験ニライカナイ
代表 加蘭 明宏さん

恩納村むら興し協議会・観光振興促進部会副部長

沖縄体験ニライカナイ

住所：沖縄県国頭郡恩納村字恩納5973

恩納村の人口：約10,300人
恩納村の面積：50.79km²



沖縄体験ニライカナイの事務局、恩納村ふれあい体験学習センター

（聞き手 電気ふるさと編集部 清水珠子）
■ニライカナイでは様々な体験プログラムを実施していますね。

加蘭：基本的には沖縄のありのままの自然や暮らしに触れながら、農業など様々な体験をしてみようという内容です。「サトウキビの収穫から黒砂糖作り」、「シーカヤック体験＆海岸観察」、「エイサーの踊り方やパーランクー（小太鼓）のたたき方教室」など、非日常が存分に味わえるものを多数用意しています。

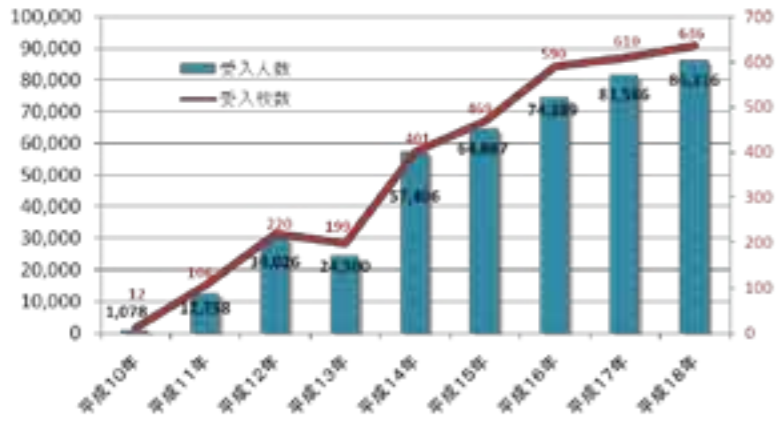
■加蘭さんの考える「魅力ある体験交流」とはどういうものでしょうか。

加蘭：端的に言うくと、共通の体験を通して感動を分かち合い、結果的にの役目はいかにそういう人を発掘するかです。

■ここまでの事業展開で苦労された点もあると思いますが。

加蘭：平成十三年は同時多発テロの風評被害で当初の予約が半減しました。先生方や旅行会社にいくら大丈夫だと説明をしてもだめでした。でも「こんな体験は沖縄でしかできないから」と来てくれた方々もいました。そこで気がついたことは、「行き先を沖縄から簡単に変更されるようではだめだ。どんな状況下でも沖縄に行きたくなるプログラム作りと指導員の質の向上を図る必要がある」ということ。それからは以前にも増してこだわりを持って取り組むようになりましたね。

沖縄体験ニライカナイの受入実績（教育旅行分）



参加者、指導員ともども感動を分かち合う体験を推進している



シーカヤックで無人島まで行く体験も

■今後の展望を教えてください。
加蘭：各学校の修学旅行費用の上限枠は引き下げられるなか、沖縄へ向かう航空運賃や沖縄での宿泊費、バス料金などは値上げが進んでいます。こうした厳しい情勢下で受け入れ人数を増やし続けていくためには、いろいろ考え方を変えなければいけないと思っています。例えば、今までは、いい体験をするためには最低二時間、プラスある程度の料金が必要なので、一時間半でオーダーがあった場合はお断りしていましたが、料金の安い事業者へ流れる学校もあったと思います。でもそれで体験内容が貧弱な事業者へいかれても、沖縄全体のイメージが下がり、次から来てもらえなくなる。今後は時間にも料金にも柔軟に対応していこうと思っていますし、沖縄全体のレベルアップのため平成十九年六月に「沖縄県体験型観光推進協議会」を立ち上げたところです。いい体験は心を豊かにし、「生きる力」を育みます。生きていく上で大変なことがつらいことはいくらでもありますが、それに勝る喜びや楽しみはもつとたくさんあるということを今後とも伝えていきたいと思っています。

が肝心なんです。最初にまずお互いを見つめ合い、認め合う時間が必要です。そして最後には感想を出し合うことによってお互いを感じ合う。ひどいところは、いきなり何かを作り始めて、終わった人からバスに乗って、ということをやっていますが、これでは大きな感動は生まれませんよね。

■魅力ある指導員とプログラムで、具体的にはどのような感動が生まれますか。

加蘭：我々のところには二十〜八十八歳までの指導員がいますが、特におばー（おばあちゃん）たちの豊かな心には非常に学ぶことが多いですね。体験学習に参加した中学生達が作業をほったらかして遊んでいると、八十歳のおばあちゃんに叱り飛ばされるんです。でも本気で怒った後はわが子や孫のように本気で可愛がるんですね。最初はふてくされていた子供達も徐々に心を開き、別れ際には叱られたおばあちゃんに抱きつき泣き出す子もいるほど。ハートのある体験交流は子供達の心を丸裸にするのです。これは努力すればできるというものでもありません。出来る人ははじめからやっていますから。私たち